

ヨークシャー学校小説に見られる グローバリゼーションと地域主義の共存 ——ジャック・シェフィールドの場合——

武田ちあき 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：学校小説、ヨークシャー、グローバリゼーション、地域主義

1. 序

イギリスの東北、ヨークシャー地方を舞台とする学校小説の人気作家、ジャック・シェフィールド(Jack Sheffield, 1945-)の『先生』シリーズ(*Teacher series*, 2004-)は、第1作『先生、先生!』(*Teacher, Teacher!*, 2004)から、最新作『学校再開』(*Back to School*, 2020)まで、現在13巻に及ぶベストセラーである。架空の村ラグリー(Ragley)に展開する牧歌的な作品世界は、英国国民の理想郷の観を呈し、ともすれば保守的な印象を与えかねない。創刊半世紀の歴史を誇るイギリスの季刊誌『このイングランド』(*This England*)¹が、英国の田舎の美しい風景写真満載の、謳い文句のとおり「英国一ラブリーな雑誌」の外観を備えつつ、じつは国粹主義を標榜する右翼雑誌であることを思えば、まさにこの雑誌のグラビアから抜け出てきたような雰囲気をもつラグリー村の物語が、同様に英国至上主義に与するものと即断されても不思議はない。

しかし、その筋運びや筆致をつぶさに追うと、ラグリーの村人たちのくらし、学校のできごと、家庭のやりとりには、地域主義とグローバリゼーションが、葛藤しつつも共存していく、という、思いがけないほどに進歩的な構造が浮かび上がる。よその土地からこの村に赴任した小学校長の経歴をもつシェフィールドが、自分を主人公・兼・語り手としてこの連作小説に託した思いは、じつは旧来の村社会を新たな世界と未来へ開く、という革新の方向性をもった願いなのではないか。そうした啓発的な社会教育を、作者は文学という形を通じて、ひろく実践しているのではないか。

本稿では上述の構造の存在を、村のドラマ・ライフスタイル・流行、また村人のイデオロギー・偏見・固定概念などの中に特定するとともに、そうしたグローバリゼーションと地域主義の両立を進めるもの・阻むものとして、どんな要因があるかを探究する。その際、背景をなす国際事情、とくに戦争・紛争と、それに伴う「他者」像を、時代をさかのぼりながら作品の中にたどっていく。さらに、このテーマにおいて学校小説としての特色・意義がどこにあるかを分析することにより、シェフィールドの作家としての真価を明らかにしたい。

2. 村のヒーローたち

2-1 村の風景

ラグリー村で見られる最も顕著なグローバリゼーションの形は、アメリカのメディア、とくにテレビと映画の影響である。²しかし、トムリンソン(1993, 2000)が提示する、グローバリゼーションがアメリカナイゼーションと同義で、アメリカの商業文化が土着の伝統文化を駆逐し画一化

していく、文化帝国主義の典型的な様相を、この村は必ずしも帯びていない。シェフィールドによるキャラクター造型の最大の特徴は、村人たちの中に、アメリカの映像文化におけるグローバルなヒーロー像と、イギリスの民俗文化におけるローカルなヒーロー像が、親和し、統合されていることなのである。いわば上書きモードではなく挿入モードで米国文化が英国文化になじんでいる、そうした登場人物の例を、以下に列挙してみよう。

まず農場主ディーク(Deke)は西部劇の大ファンで、息子たちの名もウェイン(Wayne)、シェーン(Shane)、クリント(Clint)と、西部劇のスターや主人公で揃えるほど。西部劇の主題歌・挿入歌を村のパブで歌って小遣い稼ぎをするプロ級の歌手で、『真昼の決闘』(*High Noon*, 1952)のテーマの歌いっぷりは伝説的。ステージだけでなく農作業の時も、頭のとっぺんからつま先まで、西部劇のコスプレで身を固める彼は、アメリカの西部劇をイギリスの農場で完璧に再現させている。

しかしその模倣が徹底的であればあるほど、イギリス人である彼とアメリカの本家とのズレが、そこはかとなくほのぼのとした笑いを醸し出す。小柄な彼は、西部の男たちの堂々たる体躯の迫力には及ぶべくもない。その農場もイギリスの田園ならでは、どこまでも穏やかにうねる緑地、しかも国立公園になっているほど風光明媚なヨークシャー・デールズ地方。荒々しい西部の砂漠とは対照的もいいところなのが、ほほえましい。

彼が最も「カッコいい」時は、晩秋のガイ・フォークスの夜祭で、かがり火を焚く材料運びで村のためにトラクターを出動させる時、そして厳冬の大雪の朝に、村役場の除雪車を駆動する時。彼はイギリスの村の生活の要を担う、頼りになる救い主なのだ。その本名、デリク・ラムズボトム(Derek Ramsbottom)は、名はチュートン語(ゲルマン語)で「一族の支配者」の意(Jarvis 30)、姓の-bottom は、ヨークシャー地方では-thwaite と並んで、よくある語尾。その名にし負う、生粋の土地っ子の雄であることの誇りと、アメリカ文化への傾倒が、彼においては矛盾なくアイデンティティの構成要素として溶け合っている。

次に、村一番の荒っぽい少年ヒースクリフ(Heathcliff)は、言わずと知れた、このヨークシャー地方が舞台の英文学の古典、エミリー・ブロンテ(Emily Brontë)作『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)の登場人物の再来。治安の悪い貧困地区バーズリー(Barnsley)からラグリーに引っ越してきた、という設定は、ブロンテのヒースクリフの「ジブシーの子」という出自に似通う、「流れ者」的な人物像を想起させ、イギリスの文学の伝統を強く意識させる。

この問題児が、じつは見かけによらず心優しく、時には粹な男気を見せるのが、シリーズの読みどころである。たとえば、映画代を稼ぐため村の店の御用聞きを始めるも、配達先の老婦人が泥棒に家を荒らされ、亡夫との思い出の写真まで割られたと知り、その日の収入を全額使って写真立てを買い、そっけなく手渡す話(第8巻第12章)。村の女の子が「桃ちゃん」と呼んでこよなく可愛がっている豚が、明日屠殺される運命と知り、一念発起してこの豚を誘拐し、村はずれの小屋にかくまう話(第10巻第15章)。この快男児は、困った村人を助ける義賊ロビン・フッド。彼はイギリスの伝説・民衆文化をも、その身に引き継いで輝いている。

このようにきわめて英国的な、地域主義のヒーローに見えるヒースクリフだが、写真立ての話でも、豚の話でも、その活躍を支えているのは、兄を尊敬してやまず、どんな使い走りも辞さない弟のテリー(Terry)。この兄弟の抜群のチームワークは、バットマンとロビンのコンビにたとえられている。つまりアメリカ文化はイギリス文化と競合するのではなく、イギリス文化を引き立て、補強する要素として添えられているのだ。

バットマンとロビンの英国版には、もう一組、村のごみ収集人ビッグ・デイヴ(Big Dave)とリ

トル・マルコム(Little Malcolm)のペアがおり、しかも従兄弟どうしの彼らの姓は両方ロビンソン(Robinson)、とアメリカ映画のイメージがいつそう強調されている。ほかにも、『ワンダー・ウーマン』(Wonder Woman)のワンダー・ブーツを履く、村のコーヒー・ショップのメイドでモデル志望の娘ドロシー(Dorothy)、『スター・トレック』(Star Trek)おたくで、薬局の奥の自室を宇宙船の船室にしつらえている、村の薬剤師ユージン(Eugene)らが、ラグリー村をリトル・アメリカにしている。それでいて、かれらの会話は思いっきりヨークシャー方言の訛り丸出し。この視覚と聴覚のギャップは、英米の文化のすりあわせの妙味として、笑いのうちに受容されている。

一方で、純・英国的なキャラも配されており、村の金物屋の主人ティモシー(Timothy)は極度に几帳面で、ディケンズ(Dickens)の『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol, 1843)に出てくる「ちびっこティム(Tiny Tim)」にちなんで「きっちりティム(Tidy Tim)」と呼ばれている。こうした人物の存在が、ラグリー村における英米の文化のバランスを安定させていることも見逃せない。

このようなブレンドないしハイブリッドの形で、ある種の幸福な文化的インテグレーションが可能となったのは、ひとつには、なんといっても相手国のアメリカがイギリスの軍事的同盟国であり、物語の時代がサッチャー首相とレーガン大統領の蜜月の期間と重なっていたことが大きい。フォークランド紛争に身を投じる国民にとって当面の敵はアルゼンチンであり、アメリカは他者ではなく仲間として好意的に認識されたことが、文化の移入のハードルを下げる効果をもったことは想像に難くない。

もうひとつ、もっと大きな要因には、イギリス人の帝国主義的心性がある。新しいもの好きで、新奇な珍品を珍重する国民性は、産業革命以降のヴィクトリア朝の発明の繚乱、³また博物学・植民地貿易・蒐集趣味の隆盛⁴に遺憾なく発揮されており、名物キャラがあふれるラグリー村は、博覧会や博物館の展示室⁵に重なる。多様なアイテム、異なるファクターが豊富なほど、コレクション全体の価値は高まる。アメリカ的なものは、そうした豊穡の体系のもとにめでたく併合される、という形をとっているのである。

2-2 学校の風景

ラグリー小学校は、こうした村の大人たちが生まれる現場である。やはり英米の文化が入り混じる、この学校の風景は、村の新旧文化混成の縮図であるだけでなく、その源泉なのだ。

その最も端的な場面は、放課後の校庭である。夕方の子ども番組を見るために、喜々として家路を急ぐ女子。スター・ウォーズの光線剣ライトセーバーを振り回して遊ぶ男子。そんなアメリカ流の娯楽に浮き立つ児童の横に、イギリス伝統の遊びに興じる学童の姿が並ぶ。まずは男児の、栃の実割り(conkers)。これは、栃の実に紐を通し、紐の先を持って実をぶつけ合い、相手の実を割る、日本の「めんこ」にも似た遊戯。この材料供給のため、イギリスではすべての小学校の校庭に栃の木が植えられており、栃の実割りは秋の新学期の風物詩。日本で春の新学期に桜が欠かせないのと同じである。女兒のなわとび歌も、歴史を重ねた伝承童謡。第6巻で出てくるのは、次の歌。

Teddy bear, teddy bear, turn around.
Teddy bear, teddy bear, touch the ground.
Teddy bear, teddy bear, two high kicks.
Teddy bear, teddy bear, do the splits! (228)

(くまちゃん、くまちゃん、ぐるりんこ。
くまちゃん、くまちゃん、ぺったんこ。
くまちゃん、くまちゃん、けとぼして。
くまちゃん、くまちゃん、足ひらけ！)

世代を超えて、オルゴールのように繰り返される調べ。迎えに来たシングル・マザーは、これを聞いて童心に帰り、うつ病に負けずに娘たちを愛そう、と気丈に決意する。ここには生きるエネルギーを与えてくれる、国民の心のふるさと、懐かしいイギリスの小学校の原風景がある。

イギリスは日本と違い、児童の送り迎えを保護者がするよう法律で定められている。したがって放課後の校庭は、学校と親の接点であり、学校の過去と未来が会おう場所でもある。英米の新旧文化が併存し、ときめきと郷愁が肩を並べる、このトポスは、地域や保護者と協力し、伝統と革新のバランスをとっていく、学校の教育姿勢を象徴してもいるのである。

学校の敷地周辺、教師たちの息抜きの場にも、同じ構図が見られる。ノラのコーヒー・ショップ(Nora's Coffee Shop)は、教員・事務員・業者もごひいきにする村の社交場であり、同時に、隣の中学に進学した卒業生たちも集う若者文化の発信地。ジューク・ボックスからはアメリカン・ポップスの最新ヒット・チャートが流れ、テーブルではアイドル雑誌のグラビアがめくられる。村の小学校で仕込まれた礼儀正しいことばづかいで、生徒が恩師と旧交を温める場面は、前述の教育姿勢が実を結んでいる証拠である。

このコーヒー・ショップは、もともとはドリス・クラターバックのティー・ルーム(Doris Clutterbuck's Tea Rooms)といい、州都ヨークの有名な紅茶店、ベティのティー・ルーム(Bettys Tea Rooms)をお手本にした、由緒正しい正式な英国紅茶を愉しむ優雅な空間だった。それがコーヒーをマグで飲む、アメリカ風のカジュアルなカフェに衣替えして繁盛しているのは、いまだにこの改装に不満をこぼす村人も残っているとはいえ、この田舎にも、世界的な潮流を受け入れる柔軟さが十分にある印といえる。

ドリスは店を手放す時、長年務めてきた毎年恒例の村のパントマイムの主役も、ノラに譲る決意をし、舞台衣装のアルプス風の胴着を贈る。白雪姫だろうと『オズの魔法使い』のドロシーだろうと、どの演目でも毎回使われるこの胴着は、村の劇の伝統の象徴。ノラはその後、中年太りしてダイエットに苦労しながらも、ドリスの思いを引き継いで、この衣裳を着続ける。ノラにおいても、村の目抜き通りに新風を送りつつ、村の精神を古風を守る、という平衡が実現しているのだ。

そして、教員たちが仕事を終えてくつろぐ場所は、学校のすぐ向かいのパブ、ロイヤル・オーク(The Royal Oak)。これはイギリスのパブで最も多い店名の一つ(櫻庭13)で、見るからに英国らしさの代表。この伝統のスポットは、村人たちが一日の最後に腰を落ち着ける、安息と安定の場にして、村の重心。村はずれのもうひとつのパブが今風にリニューアルして不評なのに対し、こちらはあくまでも旧式を貫き、揺るがぬ定評を誇る。ティー・ルームとは逆のパターンであることがまた、全体としての釣り合いをとっている。

複数の文化が両立する村のヒーローたちの背後では、彼らの養成所ないし楽屋としての学校が、地域社会と連携して、その心性を育てていた。文化の受容における学校教育の役割と可能性を、シェフィールドの物語は提示しているのであり、小村にあっても広い視野から、健全な良識を持ち、守旧と変革の間で舵を取る絶妙な手腕に、教育者としての彼のメッセージが読み取れるのだ

う。⁶

3. 東洋のヒロイン

3-1 国際情勢と村社会

アメリカの商業文化とはまた異なる形で、この村社会に及ぶ国際情勢の波を、シェフィールドはひとりの転入生のエピソードで描いてみせる。彼の小説で繰り返されるイメージのひとつに、「池の水面に投げた小石のまわりに広がる波紋」があり、これは学校の正面にある村の広場の池のほとりで、校務を離れ、しばし過ごした無為の時間——彼の実体験の所産である。村で起こるできごとが、はじめは小さな水しぶきだったのが、いつのまにか、池をくまなく覆いつくす大きな波形となって、すべてを前とは異なる姿に変えてしまう。村役場で開催される霊能者のショー（第6巻第13章）も、学校の事務長と掃除婦が巻き込まれた交通事故（第6巻序章）も、村人ひとりひとりの思いや暮らしの、思わぬ深いところまで届き、それぞれの生き方を変えるほどの影響を及ぼす。そんな小石のひとつが、第1巻第14章に現れるベトナム人の少女、ピン(Ping)である。“Her name was Ping.” (201)（「その子の名はピン。」）という、この章のオープニングは、まさに池に投げられる小石のごとく、短い一文だけで一段落を成して空白を孕み、後にひく余韻を残す。

ベトナム戦争の漂流難民「ボート・ピープル」(Boat People)のひとり、「ボート・ガール」(Boat Girl)であるこの女兒は、港湾都市ニューカッスルの養親宅へ引き取られる途上、ラグリー村に短期滞在中のみ通学予定。連絡を入れる学校ソーシャル・ワーカー、受け入れ手続きを整える校長・事務長、付き添いで来校する養母、といった大人たちの落ち着いた対応は、当時のイギリスの難民政策が学校現場で、少なくとも実務上は円滑に実施されていたことを示唆する。

だが国民感情はまた別であることを、シェフィールドはすかさず描き出す。日頃から何かにつけて校長室に殴り込みをかけてくるモンスター・ペアレントが、朝子どもを送りに来たついでに、この打ち合わせに制止を振り切って割り込む。

“I’m ’ere on be’alf of a lot o’ parents,” she announced. “We don’t want no Vietnams ’ere, if you please. They’ll bring our kids down to their level. So we don’t want no Boat People ’ere.” (203)

（「親のみんなを代表して来ただよ」と彼女は言い放った。「おらたちやベトナム人なんか、まっぴらごめんで願いてえな。おらたちのわらしも、そんなとこまで落ちぶれちまうべき。流れ者なんざ、ここにやあ、いらねえだ。」）

この妄言に、さすがの校長も堪忍袋の緒が切れる。一週間の面会拒否を申し渡し、眼前でドアをぴしゃりと閉めて追い出し、「この手の無知な偏狭さは、大衆向けの新聞があおるせいだし、ましてこの御仁、人一倍だまされやすいときてる」(203)と嘆く。

無教育ゆえに信じ込みやすい、この母親の愚かさは、確かにイギリス労働者階級の一面を代表している。そして、この排外主義の根には、難民・移民のインテグレーションを阻む大きな要因のひとつとして、帝国主義時代のヒエラルキーに基づくアジア・アフリカへの蔑視、旧植民地差別、人種差別が執拗に残存している。

ふだんはエレガントな文体を持ち味とするシェフィールドが、自国の恥たる白い屑と、遠い異国の黒い珠玉を突き合わせてみせる、そのコントラストの容赦ない強烈さには、人として、教育者としての義憤が沸き立っている。イギリス人のモンペの母国語がコテコテの田舎訛りなのに対し、ベトナム人の養母の英語は明確かつ正確で、明らかに高学歴。この女性はピンと同じく元・難民で、もう 20 年以上続いているベトナム戦争の初期に渡英し、すでに英国に同化した世代であることが推測される。発音も知性も品性もノン・ネイティブがネイティブを凌駕するこの図式は、発音が階級と同一視されるイギリスにおいて辛辣きわまりない皮肉であるとともに、上掲の宗主国と植民地のヒエラルキーをまるごと転覆する過激な意匠でもある。

さらに、南シナ海に沈んだピンの亡父は、ベトナムでメコン・デルタの灌漑に携わり、米の増産と祖国の食料自給率向上の夢を抱く、誇り高きエリート技術者だったことが明かされる。ピンも、短い在校期間ながら、朗読と詩の創作ではラグリー小学校のトップに。やがて養母と同じようにこの異国で教育を得て、長じてアメリカへ渡り、有能な小児科医として成功を収めることになる。モンペの子たちが逆立ちしても届かない高みへ登りつめるピンの進路は、ベトナム人の「レベル」を蔑んだイギリス人への、痛烈な一撃になっている。

そして、このモンペの名が「ブラウン夫人」(Mrs Brown)であることには、作者の隠れた意図がにじむ。“Brown, Jones, and Robinson”というイディオムは、「ありふれた人々」、「世間」の意。彼女のような頑迷な妄信が、例外どころか常識として通用しているイギリスの実情に警鐘を鳴らすべく、据えられた姓とも解せる。この成句と関連する“astonish the Browns”という表現は「偏見ある隣人たちにショックを与える」という意味。これはまさしく、この章の内容そのもの。この章のタイトルにしてもいいくらいである。なにしろ、もともとが「裏・学校日誌」として書かれたこの連作小説においては、“The Boat Girl”⁷という章題の裏タイトルとして、この句が響き、スパイスを効かせている感じが確かにある。いつもさりげなく小粋な趣向をあしらう心憎い作風の、この作家の面目躍如たるどころ。東洋の小さな女の子が「ブラウンさんたちの度肝を抜く」までをたどるこの章は、国際情勢の波及による村社会の刷新を描く寓話になっているのである。

3-2 学校行事と村社会

ピンという小石が発した波を広げる追い風になったのが、この学校の教職員一同の支援である。かれらは「手負いの子鹿のように立ちすくみ、やせ細った足はふるえ、見開いた目に涙をこらえ、こんなに怯えた子どもは見たこともないくらい」(202)だった傷心の戦災孤児に、生きる力を取り戻させるだけでなく、異国の児童を歓迎し尊重し、平等で公平な指導をすることにより、他の児童や保護者の目を国際理解・国際親善に開いていく。学校は国際教育をプロデュースする場として機能しており、それが最も際立つのは、教職員たちの機転で発案された学校行事である。

そのひとつが、ピンの誕生会。初登校日の提出書類で、今日がピンの誕生日と気づいた事務長は、何かお祝いをしよう、と校長に発案。すぐさま校長は、ケーキを焼いてくれるよう、掃除婦に依頼。掃除婦は二つ返事で快諾し、材料の買い出しに走り、ボウルとオーブンの借用を給食調理師に打診。校長は児童たちに声をかけ、ケーキ作りの助手のボランティアを募集。調理師は児童全員が参加できるよう菓子パン作りも提案し、用務終了後も居残っての手伝いを申し出て、放課後をパーティにしよう、と企画を発展させる。校長は養母も勧誘。養母は調理師と気が合い、レシピの交換を約束。校長は学校カウンセラーも招待。かくして、各人が知恵を出し合い、絶妙な連携で、全校を挙げての盛大な歓迎会が実現する。それは調理実習と交流給食とお楽しみ会が一緒くたの、総合学習の場。「ピンが同級生になってくれて、ほんつとに、えがった！」(210)と

喜ぶ男子の声は、この即興の行事がピン一人のためでなく、児童全員に大きな教育効果を及ぼすものだったことを裏付けている。

もうひとつの行事は金曜朝会。毎週の定例会ながら、ピンが作文を読むという噂が村中に広まり、いつになく大勢の親が参観に来て、通常の教育活動が、特別な発表会に転じる。それは児童と保護者の両方にとって、国語と社会、とくに歴史の、教科横断的な学びの場となるのである。

愛読書がアーサー・ランサム(Arthur Ransom)の『ツバメ号とアマゾン号』(*Swallows and Amazons*, 1930)⁸という、この10歳のベトナム人少女の、英語の見事さ、声の明晰さ、朗読の巧みさ、表現の率直さに、親たちは心打たれる。この学校が好きで、本がたくさんあり、友だちもたくさんできた、初日には誕生日のケーキを作らせてもらい、ろうそくを吹き消す時に願い事をするのだと教えてもらった、でもその内容を言ったら願いがかなわない、というので、お祈りの時に、母と父にだけ告げた——そう語るピンのことばを、誰ひとり身じろぎもせず、物音ひとつ立てず、あるいは目を赤くし、あるいは涙をこぼし、あるいは両手を握りしめ、あるいは頭を垂れて、じっと聞き入る大人たち。ピンは続ける。

“When I was a little girl there was a war in my country. Saigon is a big place in Vietnam and that was my home. My mother and father and all my relations had to leave quickly. We sailed in a small boat across the South China Sea. It was very dangerous and everyone was frightened of pirates. The sea was very big. In the atlas in the library, it says the sea is a quarter of a million square miles but we still found our way. We landed in Thailand. All my family died because they had no food. They gave me some water and I was the only one left. Before she died, my mother was too weak to walk but not too weak to smile. I will always remember her smile. It was like the candles on the cake.” (211-212)

(「わたしが小さかったとき、わたしの国では戦争がありました。サイゴンはベトナムの大きな町です。そこがわたしのふるさとでした。母も父も親戚も、みんなすぐに去らなければいけませんでしたが。わたしたちは小さなボートで南シナ海を渡りました。そこはとても危険で、だれもが海賊を恐れていました。その海はとても大きかったです。ここの図書室にある地図には、25万平方マイルある、と書いてありますが、それでもわたしたちは行き先へたどりつきました。タイに上陸したのです。家族はみんな、食べ物がなくて死にました。わたしには水をくれて、それでわたしだけが生き残りました。亡くなる前に、母は弱っていて歩けなかったけれど、でも弱っていてもほほえむ力は残っていました。母のほほえみを、わたしはいつも忘れません。それは、あのケーキのろうそくのようなようでした。)」

読み終えて座るピン。だしぬけにひとりの母の始めた拍手が、たちまち会場いっぱいに広がる。子どもも大人も、一緒になって——ただひとり、ブラウン夫人を除いて。ピンの立てた池のさざ波は、南シナ海の大きなうねりと重なり、さらに拍手の野火となる。朝会ではいまだかつてなかった光景。それは国際理解教育の実践であり、「親」育の成功した瞬間でもある。狭量な地域主義を押しつけて、世界中のすべての子どもの幸福な未来を願う、教育における大きなグローバルズムが、この小さな村の学校で、いまここに樹立されている。

ろうそくの揺れる炎に、自分の誕生を喜び、前途を祝福してくれるイギリスの大人たちの思いと、遺していく娘の未来に祈りをこめて、命の灯の消える瞬間まで愛情を注いでくれたベトナム

の母の思いを重ねる、ピンの作文の締めくくりは、彼女自身がこの学校で、国の違いを超えて人間の本质を認知する、グローバルな観方を得たことを示している。と同時に、ベトナムの大人がこの子に託した希望と、イギリスの大人がこの子に寄せる励ましが出会う、このろうそくの炎と拍手の野火は、国を問わず保護者と教員がともに支える、子どもの未来を照らしているのである。

一方で、校長が初対面でピンの漆黒の髪を「ジェットの黒(jet-black)」(202)と喩え、ヨークシャーのホイットビー特産のジェット(谷田 57-58)と重ねているところには、ピンを地域の誇りと並べ、地域の子として受け入れる、満腔の好意が表れている。⁹また、ピンの誕生祝いのケーキに調理師が選んだのは、ヴィクトリア・スポンジ。ヨークシャーの村祭りにはこのケーキのコンテストがあり、村の女たちが腕を競う、英国の伝統のお菓子。¹⁰しかもその由来は、夫アルバート公を亡くしてワイト島に隠遁した失意の女王を慰めるために考案されたもの(羽根 200)。喪からの復活を願うケーキとして、これほどピンにふさわしいものはない。それはピンの10歳の誕生日だけでなく、イギリスにおけるピンの新たな人生の誕生をも、祝っている。しかも、級友たちが作った菓子パンは、イギリス伝統の十字パン、ホット・クロス・バン(hot cross bun)。ピンの誕生日、4月3日はちょうど復活祭の季節。キリストの復活を祝うこのパン(羽根 111)もまた、ピンの再起を寿いでいるのだ。古き良き英国の伝統を、温かな善意とともに、この異邦人に注ぐべく、行事を計画し運営する教職員たち。地域主義とグローバリズムの両立を、学校教育において、真摯な姿勢と抜群の機動力で実践するかれらにとって、他者・敵は外国人ではなく、悪しき地域主義を振りかざす同国人、「ブラウンさんたち」¹¹のほうなのである。

4. 身内の敵

4-1 家族の中の敵

第10巻までの10年間、ラグリー村の1970年代から80年代を1年ごとに追ってきた『先生』シリーズは、第11巻で1950年代、本編の大人たちが学童だった頃へ、一気にさかのぼる。続く第12巻はその10年後、1960年代の物語。一世代前の第二次世界大戦後を描く、この前日談2巻は、まさに「敵」とは何かをテーマに、地域主義とグローバリズムの接点に存する他者受け入れの根本を問うている。

第11巻『新規まき直し』(Starting Over, 2018)の主人公は、ラグリー小学校の新任教員リリー(Lily)。明朗快活で才色兼備、たちまち人気教師となる彼女には、じつは重大な秘密がある。戦時に婦人農耕部隊員(Land Girl)として勤労奉仕中、同じ農場に収容されていた戦争捕虜のドイツ兵ルディ(Rudi)と恋に落ちて出産。リリーの母親フロレンス(Florence)は、この孫フレディ(Freddie)を自分の子として育てるが、近隣の疑惑の目に耐えかね、一家でラグリーへ移ってきたのである。

リリーは充実した職業生活を送りながらも、家庭生活では強烈な違和感をつねに抱き、苛まれ続けている。彼女が受け入れられずに苦しむ「他者」とは誰なのかが、シェフィールドの作品世界では思わぬ形をとる。それを検証していくことで、この作家独自のスタンスと展望が見えてくる。

リリーとルディの関係は、かりそめでも過ちでもない。ふたりが農場で結ばれたことを、リリーは後悔してもいなければ恥じてもない。自分の感じた幸福を本物として大切に思い、しかしそれは若い情熱ゆえのものであり、永続する穏やかな愛とは違う、と冷静に判断する。ルディが、身寄りのない敵兵の自分ではリリーと赤ん坊を幸せにはできない、と身を引くも、リリーだけを愛し抜いて、その後も独身を貫くのと違い、リリーには未練も恨みもない。おたがいを最大限に

尊重しあう二人の関係は、きわめて安定したものであり、真相判明後は、ルディとフレディーの親子関係も再構築される。当時の世間の目からは「女性の敵」とされかねないルディも、愛情生活において自立した女性であるリリーには、どのような意味でも「敵」ではないのだ。

逆にリリーとフロレンスの母子関係は不幸な形。フロレンスは近所の評判とは裏腹の高圧的な毒親で、私生児を恥じ、家名に泥を塗ったとして、リリーに真実の秘匿を強要する。リリーが従ったのは、母の言い分に屈したわけではなく、戦争中、ドイツ人の血ゆえに、わが子の身に危険が及ぶことを恐れたからである。そして当時、未婚の母では就職できず、生活が立ちゆかなかつたからでもある。母の命令を甘受したのはリリー本人の決断であり、リリーは自分の苦境をフロレンスに責任転嫁しない。どんなに不愉快な親でも、リリーにとって直面すべき敵は、フロレンスでもないのである。

リリーの苦悩はただひとつ、フレディーに嘘をついている、というその一点にのみある。「村の小学校の名教師が、じつは未婚の母」という世間体の問題を、リリー本人は重視していない。この、世間の感覚とのズレは、この作品における重要なポイントである。フレディーに偽りを通してきた自分、信頼を裏切ってきた自分。真実を告げた時のフレディーの反応が怖くて、いつまでも言い出せない自分。彼女の本当の敵は、現状打破に踏み切れない、自分自身の中の恐怖心なのだ。それは他者との関係を見直し、改変することが避けられない、地域主義とグローバリズムの出会いにおいても、人が最も克服すべき、心の急所なのである。

第12巻『時代は変わる』(Changing Times, 2019)では、ほんの偶然から、フレディーの出生の秘密が露見する。真実を知ったフレディーのショックもやはり、リリーが自分に嘘をついていた、というその一点に尽きる。ずっと姉と生きてきたリリーを母とは思えない、と拒絶し続けるフレディーの心を溶かしたのは、母親は子どものためならどんなことだってする、リリーのしたことはどんなに勇気が要ったかわからない、とリリーを讃える、婚約者ローズ(Rose)のことばだった。当事者の身になる、という他者認識の原点に立ち返ることの有効性が、ここでは提示されている。これもまた、国際教育の要諦をなす、心の定理なのである。

ドイツ人の父、イギリス人の母、その間に生まれた子、この3人が会する和解の光景は、敵味方を乗り越えて人が慈しみあう、新しい世界秩序の象徴となっている。そして、ドイツ人の血を引くフレディーをけなげに愛する娘の名がイギリスの国花、バラであることも、両国の友好の隠喩を成している。家族の和解と戦争処理が重なるこの意匠にもまた、作者シェフィールドの未来への願いがこめられているだろう。

4-2 隣人の中の敵

リリーたちの家族再生の物語に分かちがたくつきまとう暗い影として、和睦しえない社会の敵の存在も、シェフィールドは容赦なく描き出す。農場経営者のコー(Coe)兄妹は、そろいもそろって品も意地も悪い、村の汚点。「敵(foe)」と韻を踏む姓にも、天敵としての役どころは明白である。かれらの行使する執拗な肉体的・精神的暴力は、村社会の安寧を乱し、リリーの生命をも脅かす。

妹の名ディアドリー(Deirdre)がアイルランド伝説の悲劇の美女であることから、この兄妹は明らかにアイルランド系である。ケルト語で「恐れ」を意味する名(Jarvis 30)を冠しながら、本人は「恐れおののく美姫」どころか、周囲の人間にとっての「恐怖」。第12巻では、村の通りでリリーたちにガンを飛ばす、この怖いおばはんは、学校掃除婦は「ありゃあ、ほんつとに悪魔だべさ。まともな口もききやしねえ」(319)とこぼす。

兄のスタン(Stan)は妹に輪をかけた、根っからの悪党。金儲けのためならどんな手口も厭わず、

法律も平気で破る。礼儀知らずの暴言と酒癖の悪さで、村のパブからは入店禁止を言い渡される鼻つまみ者。素行だけでなく身なりも汚く、煙草のヤニで黄色い歯、酒臭い息、泥だらけの長靴。やはり泥まみれの車、ランドローバーの運転も乱暴で、スピード違反の常習犯。一度などは、開発業者と結託して村を存亡の危機に陥れたりもする、油断ならない強敵。シリーズでは、1巻につき必ず1回は悪事を働き、村人に懲らしめられる。

第11巻の冒頭は、村に来たばかりのリリーを、いきなりスタンがひき逃げする場面。この事件を捜査した村の警官トム(Tom)と、リリーは結婚することになる。しかしリリーの美貌に目をつけたスタンは、第11・12巻の各巻1回、計2回、リリーをレイプ未遂。トムに知れたら、トムは絶対スタンを殺す、とリリーはフレディーに口止めし、フレディーも同意。「警官に殺人をさせるわけにはいかない」というふたりの合意は、裏返せばスタンが「警官であっても殺して当然」な人間であるということ。敵意を通り越した、殺意の対象として共感を呼ぶ存在。これ以上はない、悪役(ヒール)の極みである。

第11巻に出てくる、村の宿屋の「黒人・アイルランド人お断り(No Blacks or Irish)」(59)という看板は、兄妹の具体的な悪業の数々と照らすとき、先例ないし前科に基づいた措置として、一定の妥当性すら帯びてくる。歴史的な因縁と遺恨に根差し、目の前の生活の脅威となり、抜き去りがたい危機感と嫌悪感にまみれた、解消しえない深い対立が世界には存在する、という厳然たる現実を、シェフィールドは読者に突きつける。

宥和が最も難しい相手とは、最も近くの隣国／隣人。身内こそが、最大の敵。クリステヴァ(1982)の論ずるとおり、自己の中の他者こそが、引き起こす違和感と不快感は最大級なのである。インテグレーションを妨げる障害として、これほど頑強で厄介なものはない。ラグリー村におけるコー兄妹とは、単なる邪魔者ではなく、排除しえない自らの構成要素、連合王国におけるアイルランド系住民の代表なのだ。

互いに消えることのない敵意が火花を散らす、攻撃的な地域主義の引き起こす争いは、永久に続くかと思われる戦いであり、容易には解決に至らないこと、取り組むには不退転の覚悟が必要な難題であること、一方だけでなく双方の努力なくしては妥結不可能であることを、シェフィールドは提示している。ここには、地域主義とグローバリゼーションの、ねじれたままで接点を持たずに膠着している、もうひとつの共在の形が、大いなる課題として提出されているのである。

12

4-3 学校という舞台

リリーの個人的な苦悶の超克に大きな役目を果たしたのは、じつは学校だった。新鮮で魅力的な授業。明るく温かい人柄。授業力と人間力を兼ね備えたリリーは、児童に慕われ、同僚に信頼され、村人たちには、リリーが来て学校が生まれ変わった、と言われるほどに、教員としての名声を得る。自分では最新の指導法を採り入れつつ、校長の旧式な教授法も尊重し、高い協調性と調整力で学校運営に協力する。能力ある後輩に昇進を勧め、教育実習生を熱心に指導し、本編でラグリー小学校を担うスタッフはみな、目上としてリリーが育てたのだ、ということが判明する。学校は、リリーの人間としての真価が培われ、輝く場所。それは、リリーがその名(「百合」)のとおり、真に純潔な人間であることを、立証する場であった。実際、フレディーがリリーの人間性を再発見し、母として尊敬する心境に至ったのも、学校参観が契機だったのだ。(だからこそ、その学校の正面玄関で夜リリーを襲うスタンは、性犯罪者であるのみならず、学校の神聖を冒瀆する大悪人として、「殺されてもいい人」像を決定的にする。)

学校とは、教員としての個人に与えられた、チャンスであり舞台である。「人」単位の視点で、教員の活躍の場として学校をとらえるシェフィールドの見方には、校長として人を育ててきた経歴、また児童だけでなく教員にも向けられた英国の個人主義の伝統が反映している。地域主義とグローバリズムの融合を進める突破口が、じつはここにある。学校組織として大々的に動くことが難しくても、教員個人が草の根で蒔いていく種は、やがて少しずつ芽を出し、育っていく。リリーは個人として生かされることで、学校全体に貢献するのだ。その例が、戦争についての児童との会話である。

第 11 巻で、ある男児がドイツ人(Germans)とばい菌(germs)を重ねた冗談を言う。これは戦時中から多用された語呂合わせで、イギリス学校小説の大御所、ミス・リード(Miss Read, 1913-2012)の『村の学校の 40 人』(Tales from a Village School, 1994)にも同様の例があり(15)、当時の戦意高揚ポスターにも、ナチスのカギ十字のモノグラム柄を着たばい菌を洗剤の箱の上にあしらったデザインのものがある(Cantwell, plate 27)。だがリリーは「そんなことを言うてはいけないわ」(52)ときっぱり言い渡す。別のシーンでも「先生はドイツ人をきらいでねえの」(95)と訊く児童に、「みんなきらいっていうわけじゃないのよ」(95)と答える。この「人による」という対独観は、ドイツ兵と愛し合った過去を持つリリーだからこそできる平和教育である。リリーの経験は、ふしだらでも非国民でもなく、逆に、戦後の世界の指針につながっている。他者を国や民族や集団に還元することなく、個人として対峙し受容する姿勢——それは地域主義とグローバリズムの土台をともに問い直す、根源的な転換にもなりうるのだ。

学校は未来を創る場、とよく言われるが、それが児童生徒の未来だけでなく、教員の未来にも、そして世界の未来にもあてはまるのが、ここではわかる。教員の自己実現の場としての学校の機能が、学校本来の社会的使命と直結する。そうした学校観が底流にあってこそ、リリーの物語は個人の懊悩を超え、普遍的な価値を持つのである。

5. 結

『先生』シリーズにおいて、フォークランド紛争、ベトナム戦争、第二次世界大戦、アイルランド紛争へと、時代をさかのぼって見えてきたのは、さまざまな他者をめぐって、地域主義とグローバリゼーションが、両立・併合・許容・膠着など、多様な形で共存してきた、イギリスの村の生活史と学校史である。

政治・経済・国際情勢の浮き沈みの中で、伝統と革新のあいだに健全なバランス感覚をもって新たな世界を生きていける子どもたちを育もう、と奮闘するラグリー小学校の教員たちの実践は、まさしくシティズンシップ教育の範であり、学校が社会に果たす役割と寄与するものの大きさに、読者の目を開く。

そして、この連作小説を貫く「国より人」、「教育は人」という視点は、グローバリゼーションと地域主義というビッグ・イシューを微分して個人に帰着させ、新しい時代の社会人・国際人の養成に、学校教育が草の根でなしうる、大いなる可能性を拓く。

EU からの離脱が現実のものとなったいま、シェフィールドの提示する村の情景は、この文学という形でこそ、迫真性と具体性、リアリティとライブ感をもって、明日の行路を見出すための良識と希望とを、英国国民に提供しているのである。

注

1. 誌名の出典は、シェイクスピア『リチャード二世』第二幕第一場、ジョン・オヴ・ゴントの以下の台詞。
しあわせ薄くしてねたみにとりつかれた外敵の
悪意の手の侵入にそなえて、みずからを守る
城壁ともなり、館をめぐる堀ともなる、
白銀の海に象嵌されたこの貴重な宝石、
この祝福された地、この大地、この領地、このイングランド (小田島 56)

英国の村の生活と伝統的価値を称揚するこの雑誌のナショナリズムは、反・EU の政治的活動に直結している。たとえば 1995 年、同誌はメートル法とユーロの導入に反対する一大キャンペーンを張り、「ポンドを守れ」というスローガンのもと、誌面で特集を組み、シール、ステッカー、ポストカード、缶バッジ、£の形のネクタイピン等の親英グッズを読者に大量に無料配布した。現在も英国の通貨がユーロに切り替わることなく、結局ポンドを使い続けていることは、この雑誌の主張や感覚が、国民の過激な一部ではなく多数の声を代表していることの証左といえる。

2. アメリカの映画とテレビ番組がイギリスの郷愁に組み込まれた例としては、*This England* の姉妹誌 *Evergreen* の発行元から出版され、英国の文化史・生活史として *This England* を補完する Lazell(1991, 1995)がある。なお、シェフィールドの小説技法におけるアメリカのテレビ、とくに MTV の影響については武田(2020b)を参照のこと。
3. 19 世紀のイギリス人がいかに発明に夢中だったかを、de Vries(1971)の豊富な実例は雄弁に物語る。
4. エルスナーとカーディナル(1998)が涉猟するヴィクトリア朝英国の多様なトピックは、蒐集が国民のオブセッションにもエネルギーにもなっていたことを実証している。
5. この本の登場人物たちに向けられるまなざしは、大英博覧会のカタログに注がれるものと、本質的に通い合う。
6. これはジェイムズ・ヒルトン(James Hilton)作『チップス先生さようなら』(*Good-bye, Mr Chips*, 1934)におけるチップス先生の信念、「教育の目的は釣り合いの感覚(a sense of proportion)を育てることだ」(81)という教育観を引き継いでいる。チップス先生が第一次世界大戦で戦死したドイツ人の同僚教師を追悼する場面に見られる公平な人間愛は、『先生』シリーズのリリーの原型ともいえる。
7. 「人が『ボート・ガール』と呼んで軽んじる女の子の本当の輝き」の意で、これはこれで偏見を覆すタイトルとして光っている。
8. 英国の子どもたちが船で冒険をする、この物語は、船で祖国を脱出したボート・ガールのピンに、共感と夢を与えたことと思われる。
9. ジェットは 19 世紀のイギリスで、喪服とともに着用を許された唯一の装身具。ヴィクトリア女王は夫君を亡くして以来、生涯ジェットを肌身離さず身につけていた(谷田 58-59)。校長はピンの髪に喪の色も感じ、両親を失った孤児の境遇に深い同情の念を寄せてもいたことが推察される。
10. 映画『カレンダー・ガールズ』(*Calendar Girls*, 2003)では、ヨークシャーでの、このコンテストをめぐる人間模様が描かれる。
11. 第 1 巻第 1 章では、校長就任初日にクレームをつけに乗り込んでくるこのブラウン夫人の荒い鼻息が(ヨークシャー動物園にいる)サイに喩えられており、ピンがジェットに喩えられているのと好対照をなす。
12. やはりヨークシャーを舞台とする学校小説シリーズの作家、ジャーベイズ・フィン(Gervase Phinn)は『デールズ』シリーズ(*Dales series*, 1998-2007)で、ヨークシャー・アイルランド・ウェールズ・スコットランドの四地域間の連帯関係を比喩的に構築している(武田 2020a)。アイルランド系のフィンがむしろ楽観的なのに対し、スコットランド系のシェフィールドのほうが慎重で、この点においてはやや保守的であることは興味深い。

参照文献

- Blake, George Palmer, Intro. *The Great Exhibition: A Facsimile of the Illustrated Catalogue of London's 1851 Crystal Palace Exposition*. New York: Gramercy, 1995.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847; Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Calendar Girls*. Dir. Nigel Cole. Perf. Helen Mirren and Julie Walters. 2003. DVD. Buena Vista Home Entertainment, 2005.
- Cantwell, John D. *Images of War: British Posters 1939-45*. London: HMSO, 1989.
- De Vries, Leonard. *Victorian Inventions*. London: John Murray, 1971.
- A Dictionary of English Surnames*. Revised Edition. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Hilton, James. *Good-bye, Mr Chips*. 1934; New York: Little, Brown and Company, 2004.
- Jarvis, Stan. *Discovering Christian Names: Over 2000 Names with Their Meanings*. Princes Risborough: Shire, 1993.
- Kristeva, Julia. *Powers of Horror: An Essay on Abjection*. New York: Columbia UP, 1982.
- Lazell, David. *What's on the Box?: Looking Back to the Early Days of Television*. Cheltenham: Evergreen, 1991.
- . *What's On at the Pictures?: Golden Memories of the Silver Screen*. Cheltenham: Evergreen, 1995.
- Miss Read. *Tales from a Village School*. London: Michael Joseph, 1994.
- Opie, Iona and Robert, and Alderson, Brian. *The Treasures of Childhood: Books, Toys, and Games from the Opie Collection*. New York: Arcade, 1989.
- Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin, 2010.
- . *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin, 2010.
- . *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin, 2010.
- . *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin, 2010.
- . *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin, 2010.
- Ransom, Arthur. *Swallows and Amazons*. 1930; London: Random House, 2001.
- Sheffield, Jack. *Teacher, Teacher!: The Alternative School Logbook 1977-78*. London: Central Publishing Services, 2004; London: Corgi, 2007.
- . *Mister Teacher: The Alternative School Logbook 1978-79*. London: Corgi, 2008.
- . *Dear Teacher: The Alternative School Logbook 1979-80*. London: Bantam, 2009.
- . *Village Teacher: The Alternative School Logbook 1980-81*. London: Bantam, 2010.
- . *Please Sir!: The Alternative School Logbook 1981-82*. London: Bantam, 2011.
- . *Educating Jack: The Alternative School Logbook 1982-83*. London: Bantam, 2012.
- . *School's Out!: The Alternative School Logbook 1983-84*. London: Bantam, 2013.
- . *Silent Night: The Alternative School Logbook 1984-85*. London: Bantam, 2013.
- . *Star Teacher: The Alternative School Logbook 1985-86*. London: Bantam, 2015.
- . *Happiest Days: The Alternative School Logbook 1986-87*. London: Corgi, 2017.
- . *Starting Over: A Ragley Story 1952-53*. London: Bantam, 2018.
- . *Changing Times: A Ragley Story 1963-64*. London: Bantam, 2019.

---. *Back to School: A Teacher Series Novel 1969-70*. London: Corgi, 2020.

This England. Vol. 28 No. 4. Winter 1995.

This England. 12 May 2020. <<https://www.thisengland.co.uk/spr20>>

“*This England*.” Wikipedia. 12 May 2020.

<[https://en.wikipedia.org/wiki/This_England_\(magazine\)](https://en.wikipedia.org/wiki/This_England_(magazine))>

エルスナー、ジョン & カーディナル、ロジャー・編。『蒐集』。高山宏、富島美子、浜口稔・訳。
東京：研究社、1998。

櫻庭信之。『英国パブ・サイン物語——酒場のフォークロア』。研究社出版、1993。

シェイクスピア、ウィリアム。『リチャード二世』。小田島雄志・訳。東京：白水社、1983。

武田ちあき。「連合／分離の寓話としてのヨークシャー学校小説——地域間のポリティクスとパワーバランスの展開」。『埼玉大学紀要（教育学部）』。第69巻第1号、2020a。233-259。

---。「ヨークシャー学校小説におけるジャンルの交差——教育と娯楽の技法」。『埼玉大学紀要（教育学部）』。第69巻第2号、2020b。391-410。

谷田博幸。『図説ヴィクトリア朝百貨事典』。東京：河出書房新社、2001。

トムリンソン、ジョン。『文化帝国主義』。片岡信・訳。東京：青土社、1993。

---。『グローバリゼーション——文化帝国主義を超えて』。片岡信・訳。東京：青土社、2000。

羽根則子。『イギリス菓子図鑑——お菓子の由来と作り方』。東京：誠文堂新光社、2015。

ヒルトン、ジェイムズ。『チップス先生さようなら』。菊池重三郎・訳。東京：新潮社、1956。

(2020年9月30日提出)
(2020年11月10日受理)

Globalization, Regionalism and Integration in Yorkshire School Novels by Jack Sheffield

TAKEDA, Chiaki

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper focuses on ideological manifestations in Yorkshire school novels by Jack Sheffield, analyses his unique characters, dramatic plots, and impressive expressions, and discovers his belief that globalization and regionalism can coexist—blended, reconciled, and integrated in a village life. Although the pastoral and idyllic scenes of good, old days of England in his *Teacher* series (2004-) may well seem quite conservative and even patriotic, the views and prospects proposed by Sheffield are in fact pretty liberal, progressive, and enlightening. This author and ex-teacher features the functions and potentials of a school in realizing a new, balanced world order of rising generations. He particularly lays emphasis on the importance of teachers as individuals that can grow a sense of proportion in children’s mind. Presenting various types of enemies or “the other” in the ages of Falklands War, Vietnam War, World War II, and Irish Conflicts, Sheffield invites the reader to delve into the political, historical, and psychological obstacles to conquer in the contemporary world. This realistic experience to be gained in fiction proves the practical value of literature which can serve as an illuminating, powerful, and highly effective form of citizenship education especially required in the present times of Brexit from the EU.

Keywords: school novel, Yorkshire, globalization, regionalism